

№. 92【2014年1月24日配信】
市役所本庁舎前のブロンズ像 (担当:村上)

こんにちは。臨時職員の村上です。

みなさんは青森市役所本庁舎前に右手をあげ、左腕で炎を抱いた人物のブロンズ像があるのをご存じでしょうか。市役所の前を通る方の多くが目に見えていることと思います。



市役所本庁舎前のブロンズ像

先日市役所を訪れたとき、一緒にいた祖母から像の制作者について聞かれました。私はこの像の名前も制作者も知らなかったもので、二人で像の周りを調べてみたのですが、像の名前や制作者などの情報を記すものは見当たりませんでした。

そこで、過去の『広報あおり』を調べてみたところ、第109号(昭和42年1月5日発行)に像の写真と説明が掲載されていました。

説明によると、この像は青森市出身の画家・^{はまだえいいち}浜田英一(1911―1997)の構想にもとづいて、野辺地町出身の彫刻家・^{こさかけいじ}小坂圭二(1918―1992)が制作したもので、昭和38年(1963)9月、かねさ株式会社の社長を務めた^{あぼさだきち}阿保定吉によって市に寄附されました。「青年らしくはつらつとした伸びゆく青森」を象徴して作られたものだそうです。

像のモデルとなったのは浜田英一の長男・^{ごうじ}剛爾でした。この名前にピンときたという方もいらっしゃると思います。浜田剛爾はパフォーマンス・アーティストとして活躍し、平成13年(2001)に開館した国際芸術センター青森(ACAC)の初代館長を務めました(現・青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会委員長)。私はこの像にモデルがいたということに大変驚きました。

像を制作した小坂圭二は旧制野辺地中学校在学中、教員を務めていた青森市出身の画家・阿部^{あべ}合^{ごう}成^{せい}に学び、美術家を志しました。「世界の破れを担うキリスト」(青森県立美術館蔵)などの宗教彫刻で高く評価され、青森県を代表する彫刻家といわれています。昭和 25～27 年には高村光太郎の助手として十和田湖畔の「乙女の像」の制作にも携わりました。



柳町通りの「母子像」

『小坂圭二作品集』(1984 年 究美企画)を参照したところ、市役所前にある像は「縄文の炎青年像」という作品名で紹介されていました。また、市内にある作品として、柳町通りの「母子像」(昭和 38 年制作)、リンクステーションホール青森(青森市文化会館)の「北の花杯」(昭和 57 年制作)も紹介されていました。これらの作品についても、改めて足を運んでみたいと思いました。【敬称略】

※『青森県史叢書 近現代の美術家』(2012 年 青森県)などを参考にしました。